令和６年度　喜多方市

小学校農業科作文コンクール

作品集

喜多方市教育委員会

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長　佐川　正人

今年度も市内全小学校十七校、千三百六十八名の児童が小学校農業科に取り組みました。農業科支援員の皆様を始め、会津農林事務所様、会津よつば農業協同組合様、県立会津農林高校耶麻校舎様、多くの関係機関の皆様のご支援とご協力をいただきましたことに対して心から感謝申し上げます。

今年は猛暑や大雨により農作物にも大きな被害が心配されましたが、作物は順調に育ち、各校では収穫の喜びを体験することが出来ました。農業体験を通して児童が大きく成長したことを、作文に素直な文で表現されていました。児童の作文を読むことで、新たな視点を得ることができました。常に体験を支援していただいている農業科支援員の皆様のお力添えがあってこその農業科で、支援員の皆様には感謝に堪えません。いつもご支援いただき、ありがとうございます。

今年度の作文を読み、心に残ったことが二つあります。一つは、「協力」です。田植えや稲刈りなどの農作業の

「協力」はもとより、農業科支援員の方や地元の高校生との「協力」など、多くの面で支援をいただいた方との「協力」によって体験を通して学んだことが書かれていたことが印象に残りました。

もう一つは「成長」です。作物を自分たちに見立てた作品や他の教科で学習した内容と絡めて考えた作品、日本の経済や今後の農業について考えた作品など、作物の「成長」を通して、児童の「成長」を感じました。このことが心に残っています。

今年度も、市内全小学校十七校の三年生以上の児童が、小学校農業科作文コンクールの学習に取り組みました。紙面の都合上、入賞した二十八点の作品のみの掲載となりますが、農業科作文コンクールに取り組んだ全ての児童に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

結びに、ご多用の中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生始め、研究会での貴重なご意見をいただくとともに、審査においても慎重に審査していただきました審査員の皆様へ感謝を申し上げます。今後もこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたしまして、作品集発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

寄稿

「文明の転換点で～人類の営みと農業」

関東学院大学教授　佐藤　幸也

1　文明の転換点と農業や教育

小学生の皆さんは、10年後に令和の始まりは地球がはじまって以来の大きな文明の転換期だったと理解することでしょう。

ところで、私たちは言語と数式などの記号によって考え、表現し、多様な文明と文化を作り上げてきました。その歴史の中で、人類は二度の大きな変化を経験しています。最初は農林畜産業の誕生。特に栽培を中心とする農業です。これによって人類は他のすべての生物と異なる世界を作り上げました。人間社会の誕生は農業から始まります。

次が18世紀ころから始まった産業革命による工業社会の誕生。現在もその延長上にあります。日本は世界でも稀に見る工業技術立国ですが、その基礎は自然と共生する日本農業の発展、すなわち農民、農家の創意

工夫と知恵の蓄積によって築かれました。世界最先端と言われる生命科学（IPS細胞他）や半導体に見られる繊細な技術も、農業知識と技術の蓄積があったからです。日本人の目や手先の繊細さは会津杜氏がそうであるように、見えない世界を見、感じ取り、それらを操作できます。その意味で、喜多方の日本酒や味噌、醤油などは世界最高の芸術と言えます。日本人は数学が得意で、文学や美術などは世界で賞賛されていますが、それらも『会津農書』を読むと、日本の農家が創造して来た天の恵みと言えます。地球という生命体と農家の知恵の融合です。

それが変わろうとしています。コンピュータサイエンスは、人間ではないロボット化された世界を生みつつあります。しかも、それらに支配されようとしています。かつてはSF小説だったものが現実になるのです。人々の暮らしの領域まで数ミクロンのチップで代用される時代がそこまで来ています。それらをコントロールする思想、制度、教育は整っていません。

そうなると、人間はいったい何だろう？生きるってどんな意味があるのかとなりますが、この「どうして、なぜ、それから・・？」という点だけは人間の証です。デカルトは「われ思う　ゆえにわれあり」と言いましたが、「問い続ける」のが人間です。そして、「問い続ける」ことが「教育」の価値です。皆さんが、米や枝豆などを育てながら「なぜ」「どうすればいいだろう」と考える。人間が人間になる学ぶ活動＝教育です。

2　生命誌から学ぶ

中村桂子先生によれば、地球の年齢は約46億年。現在約5千万種の生物おり、その半分は昆虫だそうです。ミツバチやトンボなど、皆さんにとって最も身近な生物ですね。植物や菌類なども人間の大切な仲間です。その中で、最初に登場したのが微生物で、約40億年前に登場しました。そこから地球は劇的に変化し、今日の水と緑、生命豊かな惑星になりました。

人類はつい最近生まれたばかりです。つまり、人は気の遠くなるような時間とあらゆる生命の恩恵を受けてようやく地球に登場したのです。それなのに、産業革命以降の石炭、石油を膨大に使い、地球の資源を大地から掘り起こし、アマゾンなどのジャングルも破壊しながら現在の経済的豊かさを実現してきました。つまり、地球を犠牲にして来た工業社会、資本主義経済による文明を世界に張り巡らし、文化も破壊してきたのです。そのしっぺ返しの一つが「温暖化」という気候変動です。20世紀には多くの生命を絶滅に追い込んできました。喜多方のようにいのち溢れる地域は少数になりつつあります。

人類の繁栄を築いてきた文明が終わりを迎えようとしています。もし、核戦争が起これば人類は滅亡します。

3　人類の希望は農業と教育

今世界の人々が直面しているのは高度消費社会システムで壊してきた地球の保全、再生と生き方のチェンジです。無生物である石や砂も地球です。これと水のおかげで植物が、その植物を頼りにして昆虫や鳥、人間も生きています。地球という閉ざされた生態系（カプセル）にある原子、元素の交換がなされています。目に見えぬものの動きや働きを感じ取り、これらを有用なものに育て上げるのが蔵人や農家の技です。そこに地球が生きつづけていく知恵がつまっています。農業を学ぶ意義はそこにもあります。すべての人々が健やかに生きていくための学びと教育が農業にあります。たとえ、現在の文明が滅びつつあるとしても、人間には知的好奇心と科学的に考える能力があります。自然、動植物の前で謙虚になり「なぜ」と問い続けていく先に希望があります。つまり、皆さんが喜多方で農業を学ぶことは人類の希望につながるのです。

目　次

【大　賞】

落花生作りで考えたこと　第一小学校　六年　長澤　優菜　1

農業科を通して　第一小学校　五年　板橋　愛來　2

農業科で学んだこと　第三小学校　四年　内海　大和　3

【優秀賞】

農業の大切さ　加納小学校　六年　宇内　汰祢　4

私たちの生活の中の農業　松山小学校　五年　唐橋　歩夢　5

感しゃの気持ちをもって　豊川小学校　四年　長原　寧音　6

里いもがすきになったよ　熊倉小学校　三年　山口　希乃香　7

みんなで協力したさつまいもほり　駒形小学校　三年　仁國　想大　8

【農業科賞】

小学校最後の米作り
上三宮小学校　六年　佐藤　楓　9

お米を育てて
豊川小学校　六年　結城　豊湧　10

農業を受け継ぐ
慶徳小学校　六年　佐藤　結愛　11

笑顔の赤飯届けを通して学んだこと
熱塩小学校　六年　加藤　凌空　12

食への感謝
駒形小学校　六年　眞貝　璃心　13

はじめての米作り
第一小学校　五年　田中　小春　14

仲間との米作り
豊川小学校　五年　折笠　陽菜　15

お米1つぶの大切さ
堂島小学校　五年　江花　楓夏　16

初めての田植えと稲かり
山都小学校　五年　渡部　榎乃　17

米作りを通して感じたこと
高郷小学校　五年　中島　柚羽　18

わたしが感じた農業のおもしろさ、大へんさ
第二小学校　四年　梅本　なつめ　19
農業科から学んだこと
上三宮小学校　四年　菊地　智愛　20
初めてのジャガイモづくり
慶徳小学校　四年　大竹　寛人　21
米作を通して思った事
熱塩小学校　四年　猪俣　大地　22
おいしく育ったサツマイモ
塩川小学校　四年　塚原　渉　23
はじめての農業科で学んだこと
第二小学校　三年　五十嵐　空良　24
支援員の方がたや作物への感しゃの気持ち
松山小学校　三年　堀川　柚葵　25
大豆を育てて
関柴小学校　三年　髙橋　陽那　26
カボチャの思い
塩川小学校　三年　遠藤　蒼天　27
楽しかった農業科
姥堂小学校　三年　東條　未怜　28

【大賞】

落花生作りで考えたこと

第一小学校　六年　長澤　優菜

今年、農業科で育てた作物は落花生。種まきをしたり、支援員さんに落花生のことについて教えていただいたりして気になったことがある。国産と外国産の違いについてだ。スーパーに行くと落花生が当たり前のように売られているが、その多くは外国産だ。国産、主に千葉県産の落花生も売られているが、値段は圧倒的に高い。調べてみると、どうやら国産の落花生は収穫量が不安定なために価格が外国産の三～四倍になってしまうそうだ。国産の落花生はコクがあって甘みが強いという良さがあるのに、価格が高くなってしまうのは残念だ。

それにしても、私は食べ物の多くを輸入に頼りすぎていると思う。社会科でも学習したが、輸入に頼りすぎると、国内の農作物より外国から入ってきた安い農作物が売られてしまい、日本の食料自給率が下がってしまうというデメリットが出てきてしまう。

そこで、食料自給率を上げるために、私たちにできることを考えてみた。それは「地産地消」を心がけることだ。学校の給食では、地産地消を取り入れている。地産地消とは、国内の地域で生産された農林水産物を、その地域で消費すること。給食時には、「今日の喜多方市産の野菜は白菜と大根です。白菜は関柴町の〇〇さんが育てたものです。感謝していただきましょう。」といった放送が流れる。ほぼ毎日だ。この喜多方でとれた野菜や米をおいしく食べられることがありがたいと思う。

落花生に限らず地元でとれた農作物を地産地消で消費していくことが食料自給率のアップにつながっていくのだ。他にも、国産のものを積極的に選ぶことも大切だと思う。

私は農業科の学習を通して、改めて地産地消のありがたさ、食料自給率との関係について考えることができた。進んで国産のものを購入し、少しでも日本の食料自給率につながっていけばと強く思った。

【大賞】

農業科を通して

第一小学校　五年　板橋　愛來

「えっ、米高すぎじゃない。」

今年の十月ごろ、新米がならぶスーパーで感じました。

去年はもう暑のえいきょうによる米の品質低下と不作で、「令和の米そうどう」という事態となっていることをそのとき知りました。高いなぁぐらいにしか思っていなかったお米が、しんこくな問題をかかえていることにとてもおどろきました。そんなことを考えているとき、ちょうど稲かりをする機会がおとずれました。

稲かりでは、肉体労働などで農家さんや、昔の農業の大変さが分かりました。少しでも農家さんの仕事をやってみると、お米に親しみのわき、もっとお米のことを調べたくなりました。調べてみると、「令和の米そうどう」に加えて、地震のえいきょうもあることが分かりました。一月一日に能登半島地震があり、大きなひ害をおよぼしました。それをきっかけに、日本人の地震への意識が高まったそうです。さらに、「南海トラフ地震へのけいかいを」というニュースも出ました。それによって米を備ちくしようとする人が多くなったそうです。

もう一つ、大切なことを学びました。それは、「いただきます」という言葉についてです。この言葉は、命をいただいていることや、食べ物を育ててもらっていることに対しての感謝を伝える言葉だそうです。なんて素晴らしい言葉なんだろう。言葉の意味を知ったとき、そう思いました。

これまで何気なく食べていたお米ですが、いろいろな問題があったこと、「一つぶ残さず」の意味に気付きました。これからは、お米や農業について考え、様々な人や物に感謝するようにしたいです。

今日も茶わんに米が光っています。

「手を合わせてください。いただきます。」

【大賞】

農業科で学んだこと

第三小学校　四年　内海　大和

ぼくは、農業科で学んだことが大きく三つあります。

一つ目は、「協力する」ことです。ぼく達四年生では、落花生を育てました。総合的な学習や農業科で落花生を育てていくにつれて雑草を抜かなければならなかったり、苦土石灰をまいたり、カルシウムをあたえなくてはならなかったりと様々なことをしなくてはいけないと知りました。それをみんなで朝の時間や、総合の授業の時間で、苦土石灰が入った水をみんなでまくなど協力して行いました。他にも農業科で里芋を松の子班のみんなで植えたり、水やりをしたり、収穫したり協力して行うことで農業は一人じゃなく「協力する」ということが大切だと学びました。

二つ目は「大変さ」です。これまでにニンジンや、大根、里芋、落花生、大豆、サツマイモなど様々な野菜を育てる中で、雑草を抜いたり、鳥から守るために光るテープをぼうにかけて畑の土にさしたりするのが大変でした。ぼくがふだん食べている野菜は、農家の方達が手間や時間をかけて作ってくださっています。それなのにぼくは、雑草を抜いただけで大変だと思ったので、農家の方達はもっと大変なことをたくさんしているのだと思います。それをいつも農家の方達は行っていると考えるととてもすごいと思うし、もっと感謝して野菜を食べようと思いました。

三つ目は「楽しさ」です。野菜を育てることは大変さもありますが楽しさもあります。ぼくは、種をまくときに手ぶくろを外して、素手で土を感じながら種を植えたり、長ネギをだいたい同じ間かくで置いていったりするのは楽しかったです。また、みんなで協力して雑草抜くことや収穫したことも楽しくていい思い出になりました。

ぼくは、この一年間農業科で様々なことを学びました。学んだことを改めて考えると、ぼくにとって農業は必要不可欠なものだと感じることができました。

【優秀賞】

農業の大切さ

加納小学校　六年　宇内　汰祢

「何でこんなことやらなきゃいけないの。」

三年生になり、初めて農業科をやったとき、ぼくはこう思った。でも、だんだんと農業科の授業をやっていくうちに、「農業科って大切な勉強なんだ」ということが分かってきた。

農業は自分で野菜や米を作り、食べるということ。また、作った野菜を地域の人にあげたり、夢の森でも売ったりした。総合的な学習の時間の勉強だけど、国語や算数、家庭科など、いろいろな教科で学んだことを活用している教科だ。

また、自分で作った野菜や米は、食べてみるととってもおいしかった。まさか自分で育てた野菜や米がこんなにおいしいとは思ってもみなかった。でも、そこにいたるまでは本当に大変だった。水をあげたり、ひりょうをまいたり雑草に栄養がいかないように除草したり。野菜や米が大きく育つように一生けん命がんばった四年間だった。収かくのときは、「ちゃんと育っているかな」と、いつも不安だったけど、収かくしてみると、大きくとても立派に育っていたことがほとんどでとてもうれしかったことを思い出す。

「農業」って、何だかだれにでもできて簡単そうなイメージをもっていた。だけど、実際にやってみると、大変な作業がたくさんあることがわかった。また、ぼくたちが農業科でやった農作業はほんの一部で、あとは用務員さんや農業科支援員さんたちがいつも手をかけ見守ってくださっていたこともわかった。だからこそ大きな収かくにつながったのだ。

せっかく出あえた農業という仕事。これからは家で野菜を作ることができたらいいなっと思う。今度は用務員さんや農業科支援員さんはいない。でもきっとまた大きな収かくができると思う。四年間もがんばったから。

三年生のときのぼくの疑問に今ならこう答えられる。

「農業科って、生きていく上で、食べるということで、本当に大切な学習なのだよ。」って。

【優秀賞】

私たちの生活の中の農業

松山小学校　五年　唐橋　歩夢

五月、私は、お母さんの実家で田植えの手伝いをしました。四月に種まきをして、その日から毎日おじいちゃんは、水まきをしてなえを育てて、そのなえを機械で植えました。

農業科の授業では、支えん員の方に教えてもらいながら手で植えました。こしをかがめて、どろだらけになりながらやったので、こしがいたくなり、昔の人は大変だなと思いました。

田植えから日にちが過ぎて、いねもりっぱに育ちました。十月には、昔の道具のかまを使っていねかりをしました。いねかりも手で行ったので、田植えと同じでこしがいたくなり大変だと思いました。

しゅうかくしたお米で、おにぎりを作って食べました。自分達で作ったお米はとてもおいしく感じました。

私は、食べる前に手を合わせて「いただきます。」と言った時、農業体験を思い出し、苦労して作ったお米はこんなにおいしいものだと感じ、「お米の命」を「いただきます」と言う事で、「いただきます」と言ってるのだと思いました。

米作り体験して、今も大変だと思っていたけれど昔は、全てが手作業で、大勢の人の協力で作っている事を知ることが出来ました。

私は、この日から、おいしいお米を作ってくれてありがとうございますと心の中で思いながら食べるようにしました。

毎日、お米を食べられる事は幸せな事です。自分が生産者の立場になり、お米作りの大変さや苦労を学ぶ事が出来ました。また、消費者として感謝の気持ちを学ぶことが出来ました。当たり前の事を当たり前のように思わないで、感謝の気持ちを忘れないようにしたいです。

【優秀賞】

感しゃの気持ちをもって

豊川小学校　四年　長原　寧音

五月、ニンジンとジャガイモの種まきをしました。「大きくなったら、どうなるだろう」「収かくするとき、たくさんとれたらいいな」と思ってまきました。

ニンジンが少し大きくなってきてから、間引きをしました。みっ集していると、日が当たらなかったり、栄養がいかなかったりしてよく育たないからです。ぬいた小さいニンジンは、しっかりオレンジ色にそまっていてニンジンのにおいもしました。こんなに小さくてもちゃんとニンジンなんだなとおどろきました。ジャガイモは、葉が多くなって花もさいていてよく育っているのがわかってうれしかったです。

ニンジンとジャガイモがよく育っていくのと一しょに草もどんどん生えてきました。暑い中、みんなであせをかきながら草むしりをしました。毎日、水やりにも行き大変でした。

夏休みが明けて、いよいよ、ニンジンとジャガイモの収かくの日が来ました。畑に着くと、ニンジンとジャガイモが植えられている場所からとてもいやなにおいがただよってきました。いざほってみると、ニンジンは一本以外全部、ジャガイモもたくさんくさっていました。毎日大変だったのに、「あんなに一生けん命世話をしたのに、今までやってきた意味はなんだったんだろう」とくさっている野菜を見てがっかりしているわたしたちに農業科支えん員の細田さんが言いました。

「農業は自然とのたたかいだから。」

わたしは、その言葉がすごく心に残りました。どんなにがんばって育てても、天こうに左右されたり、動物たちにあさられたりしてうまく育たないこともあるのです。ニンジン、ジャガイモを育ててみて農業の大変さと細田さんの言葉の意味がよく分かりました。いつも食べている野菜や果物、お米などいろいろな植物を大切にしていきたいと思いました。そして、それを育てている農家の人たちにも感しゃしながらおいしく食べたいです。

【優秀賞】

里いもがすきになったよ

熊倉小学校　三年　山口　希乃香

私のおじいちゃんは、農業科のしえん員として田んぼの先生をしています。畑の先生はりゅうま君のおじいちゃんやゆかりさんのおばあちゃんです。生活科でサツマイモを育てたことがあるけれど、農業科で色々な野さいを作るのははじめてなので、みんなワクワクしてはりきっていました。三年生は四年生といっしょにオクラや大豆の他に、いもに会のための里いもを育てます。

「育てるのはかんたんそうだな。でも、里いもはねっちよりしていてきらいなんだよね。」

私はこっそり思いました。

いよいよ里いもうえのスタートです。うめる里いもはゴロゴロしていました。

「深くうえるよ。」

と畑の先生に言われたので、マルチにあなをあけて、しっかりほって土をかぶせました。

水やりをしていると、里いもはグングン大きくなりました。そして葉がたくさん出てきました。葉には、黒いいも虫が発生しました。大きくて気持ち悪くて、みんなでキャーキャー言いながら、ひっ死に取りのぞきました。みんなで調べてみると「スズメガ」のよう虫だと分かりました。わたしは虫がいるということは、この畑の土もいい土なんだなと思いました。

葉は少し食べられてしまいましたが、里いもは大きく育ちました。ここまで大きくなるとは思っていなくて、みんなでトトロのかさのまねをして遊びました。

秋になりしゅうかくの時が来ました。

「くきの下についている大きいのは何かな。」

とふしぎに思いました。それはカシラという大きな里いもで、そこからいくつもの里いもに分かれてくっついていました。里いもは四百こぐらいとれて、うれしかったです。

いもに会で食べた里いもは、今まで食べたことない味だと思いました。自分たちできょう力して育てると味がかわるんだなと思いました。わたしは里いもがすきになりました。

【優秀賞】

みんなで協力したさつまいもほり

駒形小学校　三年　仁國　想大

この一年間、ぼくは、支援員さんと農業をして学んだことがたくさんあります。まず、何よりも農業は楽しいということです。支援員さんと一緒にサツマイモ植えをして、ぼくが普通に植えようとしていたら、

「植え方にはいろいろあって、すい直植え、ななめ植え、舟ぞこ植え、水平植えがあるよ。」

とやさしく教えてくれました。一つの植え方だけではなく、いろんな植え方があることを知り、ただ植えるのだけではなく、自分で考えて植え方を決める楽しさもあるなぁと、思いました。またサツマイモの苗を植える時に黒いシートがあったので、何だろうと思って支援員さんに聞いてみたら、

「これはマルチだよ。よけいな草がはえないようにしたり土の温度をちょうせつしたりできるよ。」

と教えてくれました。マルチのすきまは小さくて、サツマイモの苗は入るけど、この中に大きなサツマイモができるのか不安でいっぱいでしたが、しゅうかくの時には、小さいものから大きいものまで、たくさんのサツマイモができて、おどろきました。

そして、楽しさだけではなく、むずかしさもあることを学びました。ぼくは、農業なんてかんたんなものだと思っていました。でも草むしりや水やりだけでものすごく大変で、少し時間がたってしまうとぼくくらいの大きさまで草はのびて、暑い夏の日は、水やりをしても、すぐに土がかわいてしまい、ちゃんと育ってくれるかしんぱいでした。サツマイモ畑を支援員さんが草むしりや水やりを手伝ってくれていたことを知り、本当にすごいなと思い、うれしくなりました。

とれたサツマイモは、ポスターやレシピのチラシを作って、はんばいすることができました。今年はいろいろなことを学ぶことができたので、来年は一年生に支援員さんのようにやさしくおしえてあげたいです。

小学校最後の米作り

上三宮小学校　六年　佐藤　楓

五月。田植えの時期になりました。私は、この季節が一番好きです。どうしてかと言うと、田植えができるからです。学校での田植えも今年で六回目になりました。田植えで大切なのは「線引き」と言う作業です。農業支援員としてお手伝いをしている私のおじいちゃんとやりました。

「線引き」をするのは、高学年です。まっすぐに引くのが、とてもむずかしいです。「みんなのためにも上手にひかないと、」と思いながら、一生懸命やりました。ちょっと曲がっちゃったけれど、去年より、上手にできて良かったです。その後、低学年中学年の子たちが来て一緒に田植えをしました。苗の束を三本ぐらい取って線引きをした線が交わっているところに、一つずつ植えました。みんな泥だらけになりながらがんばりました。

「気持ち悪い。」

と言う子もいました。

「そんなことねえ。しっかり力入れてやれ。」

とおじいちゃんが言いました。毎年毎年、何十年も米作りをしているおじいちゃんにとっては、田んぼの泥は気持ち悪いどころか、大切な稲を育てる大切な栄養のです。素足で、一歩一歩踏みしめるたびに、泥の感触を楽しみました。ぐっと腰に力を入れて、線引きしました。私は六年間の中で、一番上手にできたと思いました。今まで線引きや田植えをやって、失敗したり曲がったりしたけれど、今年は、みんなで協力し、助け合いながらできました。みんなで笑い合いながら作業できてとても楽しかったです。学校生活最後の田植え、ちょっとさみしいけれど農業の大変さや、大切さを感じながら行うことができて良かったです。おじいちゃんと育てた米は大豊作でした。収穫祭ではおいしいお米を食べることができてうれしかったです。おじいちゃんは収穫祭前に床屋さんに行きました。「おじいちゃんも楽しみにしてるんだな。」と思うとうれしくなりました。

お米を育てて

豊川小学校　六年　結城　豊湧

ぼくの学校では毎年五・六年生が稲作をしています。去年は初めてだったので、六年生に教えてもらったり、農業科支援員さんから作り方を聞いたり、何をすればいいか覚えるのに必死でした。今年はその経験もあり、副班長として去年の活動で覚えたことを五年生に教えながら活動することが出来ました。

活動は種もみをまくことから始まりました。ぼくの班の種もみからなかなか芽が出ず、何日も水をあげたことを覚えています。そしてしっかり芽を出してくれたので安心しました。今年もおいしいお米になるだろう、と思いました。しかし、今年は台風の影響で大雨が降ったり、強い風が吹いたりし、稲が倒れてしまいました。通学路から倒れた稲を見るたびに、おいしいお米が出来ないのではないかと思いました。農業科支援員さんの話によると、台風など強い風が吹いたときでも、倒れにくい稲があることを知りました。今年はお米の値段が高くなっているというニュースもあったので、あまりお米がとれない年だったのだと思います。来年は倒れにくい品種の稲を育てるとよいのではないかと思いました。

それでもぼく達が植えた稲は黄金に光り、おいしそうなお米に育っていて、しっかりと収穫することが出来ました。農業科支援員さんに、穂が土につくと、稲が発芽してしまうということを聞きました。土についていた部分も、まだ、芽が出てはいなかったので安心しました。収穫祭でおにぎりにし、おいしくいただき、とてもよい思い出になりました。

ぼくは、農業科の学習で、稲や農作物は、必死においしく、よいものになろうと頑張っていることが分かりました。中学校では、ここまで農業に触れることはないと思います。ぼくも稲や農作物の頑張りに負けず、これからは祖父の米作りの手伝いや、学習、運動などに取り組み、立派に育っていきたいです。

農業を受け継ぐ

慶徳小学校　六年　佐藤　結愛

私は、六年生になって「慶徳玉ねぎ」を育てました。初めて育てる物だったので、少しワクワクしていました。

去年の六年生が秋に植えてくれた玉ねぎは、春に大きくなっていました。それを、私達は支援員さんに教えてもらいながらぬきました。支援員さんの山内さんから、「玉ねぎの根元をもって真上にぬくんだよ。」と教えてもらいました。私も、やってみると簡単にぬくことができました。

玉ねぎをぬき終わると

「生で食べてごらん。」

と山内さんが言いました。私は、「えっ。」と思いました。なぜなら、玉ねぎがきらいだからです。シャキシャキと言う食感はすごくいやでした。でも、「去年の六年生が植えてくれたし、こんなに大きく育ったもんなー。」と思い、食べることにしました。でも、手に持った瞬間、玉ねぎのにおいが鼻にツーンとしました。そして、食べたら苦かったです。次はよく煮てカレーや肉じゃがで食べたいなと思いました。

秋に、来年のための玉ねぎを植えました。来年の六年生が大きい玉ねぎをぬけるように植えたのです。一つ一つていねいに植えました。

「深いと大きくならないし、浅いと雨が降ったときに流されちゃうよ。」

と言われました。ちょうどいいところに植えるのが難しかったです。全部植え終わると苗がひょろひょろでした。どうしたらぴんと立つか山内さんに聞いてみると、

「三日くらいでぴんとなるよ。」

と言っていたので安心しました。早く大きくなってほしいなと思いました。

慶徳玉ねぎを育てて、農業を受け継ぐことが大切だと思いました。慶徳玉ねぎはこの地域の野菜として受け継ぎたいし、来年の六年生のために植えるというのも「農業を受け継ぐ」ということだと思いました。

笑顔の赤飯届けを通して学んだこと

熱塩小学校　六年　加藤　凌空

「とてもおいしかった。今年もありがとう。」

と、言ってくれたのは、一から四年生やぼくが赤飯を届けたおじいちゃん、おばあちゃんでした。ぼくはこの言葉を聞いて、「みんなで協力して最後の赤飯届けができてよかった。」と思いました。

ぼく達は毎年、赤飯届けをしています。赤飯届けというのは、熱塩小学校の五・六年生が育てたもち米と小豆を使って赤飯を作り、地域の一人暮らしをしているおじいちゃん、おばあちゃんに赤飯を届ける活動のことです。この活動は、今年で最後と言われてさみしかったけど、おいしい赤飯を届けられるように、小豆ともち米を作るときからがんばりました。

小豆を育てるのは簡単だと思っていました。しかし、去年は、雨が降らなかったので、小豆が十分に成長できず、収穫することができませんでした。暑い日も水をあげたのに、収穫ができなくて悲しかったです。しかし、今年は暑い日が続き、雨もたくさんふったおかげでつぶの大きい小豆を収穫することができました。毎朝、畑に行き、小豆の様子を見るのは大変でしたが、作物にとって天候は、とても大事なことだと知ることができました。

もち米作りでは、協力することをがんばりました。熱塩小学校の田んぼは、全校生徒で協力して育てています。田植えや田の草取り、稲刈りを農業科支援員さんと一緒に、ほとんど手作業で行いました。また、無農薬で作っているので、田の草取りを夏の間に三回も行わないといけませんでした。しかし、協力して田の草取りをしたので、予定よりも早く終わることができました。大変な作業も協力すれば、早く終わることを学びました。

最後の赤飯届けだったけど、小豆やもち米を協力して作ったおかげで、地域の方や一から四年生に「おいしい」と笑顔で言われる赤飯を作れてよかったです。

食への感謝

駒形小学校　六年　眞貝　璃心

私たちは、四月からお米作りをしました。お米は、四年生から六年生で作りました。

その中でも、特に大変だったのは、田んぼの除草の時に行ったころばしです。去年は、お米作りをするのが初めてだったので、一つのころばしでやったけど、今年は、二つのころばしでやりました。だから、いねをふまないようにする事と力の入れ具合に苦労しました。ずっと同じ力で進むと土がたまって、前におす事が出来なくなるからです。そのコツとして一回ずつメリハリをつけておすと良いと農業科支援員の方が教えてくれました。そのやり方でやってみると、うまく出来ました。土はたくさんはねたけれどおいしいお米を作るために、いっしょうけん命にがんばりました。

それから、四月に田んぼの様子をみに行きました。すると、いねは六十センチメートル、三本から四本ずつ植えたなえも、十本から二十本くらいまで増えていました。私はこの時、いねの成長力にびっくりしました。そして同じように、八月もみに行きました。いねは約百センチになり、かたいお米が出来ていました。青々としたものが、少し黄色っぽくなってきて完成が楽しみになりました。

いねかりの日、かったいねを結ぶ作業がとてもむずかしかったです。でも結んだ後に、ほすので落ちてこないように、がんばって結びました。それでも、やっぱり下に落ちてしまっているお米があったので、がんばって育ててきたからこそ、出来るだけ多くひろいました。

私は、お米作りをして、作物を育てる大変さがわかりました。だからこそ、食べ物をそ末にしない、食べ物に感謝していきたいです。作物は、気候によってかれてしまう事もあるし、野生生物に食べられてしまう事もあり、あまりうまくいかなかった年もあったけれど、それも一つの経験となって、次に生かす事が出来てよかったです。

はじめての米作り

第一小学校　五年　田中　小春

「ヌルッ」私はおそるおそるどろの中に足を入れてみた。ヌルヌルするし、べちょっとしたどろの感触が少し気持ち悪く感じた。

「キャー。」

私をふくめた何人かの女子は、ヒルが怖くて悲鳴をあげながら前に進んだ。五年生の農業科では米作りをすることになっており、この日は初めての田植えを経験した。苗を手渡されて、こんなにたくさん植えるのかと思いつつ、教えてもらった通りに苗を二、三本取り、どろの中へ根っこをぐっと押し込んでみた。そして、二つ目、三つ目と植えていくと、だんだん面白くなってきた。手渡された苗がなくなると、すぐに先生のところへ追加の苗をもらいに行った。夢中で植えていたら、どろの感触やヒルのことはすっかり忘れていた。運動着はどろだらけだし、腰も痛くなった。でも、この苗が秋にはおいしいお米になるのかと思うと、すごくワクワクした。秋になると、稲刈りをした。田んぼに行くまでの間、ちゃんと育っているのか、不安になりドキドキした。でも、細くて小さかった苗は、黄金色の大きな稲穂に育っていた。こんなに立派に育ったんだと嬉しくなった。でもそれは、水の管理や除草作業などを農業科支援員の小林さんが一生懸命やってくれたからこそである。稲刈りは、稲をしっかり持って鎌を思い切り引く。最初は刃がうまく入らなくて刈り残しが多くなっていた。でも少しずつコツをつかむとザクッと一気に気持ちよく刈ることができた。大事に育ててもらって良かったねと思いながらどんどん刈っていった。刈り終わると、自分達の手で作ったという自信と達成感で、嬉しさが込み上げてきた。

十一月下旬には、小林さんへの感謝の会を開いた。そこでは合奏やクイズをしたり、感謝状を渡したり、心を込めて気持ちを伝えた。そして、みんなで作ったお米を炊いて感謝しながら味わった。私は一粒一粒の味を確かめるようにかみしめながら大切に食べた。

仲間との米作り

豊川小学校　五年　折笠　陽菜

今年の農業科での学習では、米づくりの体験をしました。とても楽しみにしていました。その中で私は、とても心に残ったことが三つあります。

一つ目は田植えです。田植えは、たくさんたばになっている苗から、三、四本ぐらいを取って植えるのがコツでした。あまり多く取りすぎて植えると、育ちすぎてしまうことがあると聞き、気をつけて植えました。二つ目は稲かりです。今年の稲はたおれてしまっていたので、たおれている方向にかまを向けてかることがいいということを教えていただきました。そして稲をかった後に、稲のたばを作ってひもでたばねました。とても難しくて時間がかかりました。米作りの中でも、一番大変な作業だったと思いましたが、やりとげた達成感があり、とても印象に残っています。三つ目は脱穀です。足踏み脱穀機とコンバインの両方を体験させていただきました。時代が進むにつれての機械の進化が感じられ、とても心に残りました。

私はこの米づくりを通して三つのことを学びました。一つ目は、お米を作ることの大変さです。とても細かい作業がいくつもあり、簡単に育てることはできません。水や肥料、天候にも心配りをしなければなりません。農家の皆さんの大変さがよくわかりました。二つ目は手作業の大変さです。今は、全ての作業が機械でできますが、それを手作業でやっていたことには、とても感心させられます。三つ目は協力することの大切さです。全ての作業を一人ですることは絶対できません。みんなで力を合わせ、協力しながら米づくりをすることで、お米が出来上がります。そして最後に、とてもおいしいおにぎりとみそ汁を作って、収穫祭を開くことができました。とても思い出に残った農業科の学習になりました。今まで教えてくださった只浦さん、手代木さん、ありがとうございました。

お米１つぶの大切さ

堂島小学校　五年　江花　楓夏

わたしは、農業科の学習をする前は、深く考えることもなく、お米はただおいしいとだけ思って食べてきました。お米を作ることの大変さやお米一つぶの大切さについては、何も気づいていなかった自分がいました。

今年の農業科の学習は、わたしにとって、それらに気づく貴重な体験になりました。

わたしが苦労して一番心に残っていることは、だっこく活動です。

まず、足ぶみだっこく機で、もみと稲わらに分けます。六年生の二人に踏んでもらい、三、四、五年生が稲の束を差し出しました。去年まではこわくて大人の人といっしょにやってもらっていましたが、今年は一人でたくさん体験しました。稲の束ごと引っ張られてしまわないように力強くふんばる必要があるのは、やってみて初めて分かりました。また稲の束から全てのもみを一つぶも残さずにきれいに取るのは、とても難しいことでした。軽くだっこく機にのせるようにして、少しずつ回すのがコツだと、農業科支援員さんに教えていただき、やってみると、少しずつうまくできるようになり、はかどりました。

次に、とうみという機械を使ってもみに混ざっているわらのゴミなどを吹き飛ばしました。中でつまってしまわないように少しずつ入れていきました。やってもやってもわらのゴミがきれいになくならないので大変でした。

このような脱穀作業が重労働で、疲れてきた頃のことです。足ぶみだっこく機でもみを取った後、三、四粒くらい穂の先に残ったままなら、もう終わりだと思い行こうとしたら、

「まだ残ってるよ。」

と、支援員さんに言われ、はっとしました。たくさんの手間をかけ、もう暑の中で元気に育って実ったお米が、捨てられてしまっては・・・。お米一つぶずつ全てが大切な意味がわかりました。茶わんに付いた一粒も大事に味わいたいと思います。来年の脱こくでも一つぶ残さず全て取ろうと心にちかいました。

初めての田植えと稲かり

山都小学校　五年　渡部　榎乃

私は、農業科の学習で田植えと稲かりを初めてやりました。やる前は簡単そうだと思っていました。しかし実際にやってみるととても難しかったです。けれど会津農林高等学校耶麻校舎の高校生たちがやさしく教えてくれたので、上手にできました。

田植えの時は、高校生と初めてあったけれど、田植えのやり方をやさしく教えてくれました。おもしろい高校生もいて、みんな仲良くしてくれました。田植えは全て手作業だったのでとても大変でした。いつも見ているだけの田んぼに初めて足を入れたらどろが足にたくさんついて転びそうになりました。しかし、田んぼについている線に合わせて真っ直ぐ上手に田植えをすることができてよかったです。

稲かりの時は、自分たちが植えた稲がすごく育っていてびっくりしました。稲かりも初めてだったけど、高校生がやさしくかまの使い方や親指を切らない稲の持ち方を教えてくれました。上手に早く稲をかることができました。稲はチクチクしていたので少し難しかったけど上手にかり取ることができました。

私は田植えと稲かりを体験して作物の大切さを知ることができました。農家が少なくなると日本で作られるお米や野菜などがどんどん減っていってしまいます。だから、高校生たちのような若い人が農業という楽ではない難しくて、大変な職業に責任を持って働こうとしている思いがすごいと思いました。だから農家の人たちががんばって作っている作物を大事に食べたいと思いました。

米作りを通して感じたこと

高郷小学校　五年　中島　柚羽

「今年は、みんなにおいしいと言ってもらえるお米を作るぞ。」

私は五年生になって初めての米作りをした。一学期、田植えでは全方向に知らない虫。ぬけなさそうな田んぼ。いやいやのまま田んぼに足を入れた。予想は的中。いつのまにかどろだらけだった。友達に見せると、

「それほど頑張ったんじゃん。」

と、いわれて心の中でほほえんだ。

私の家と田んぼはそれほど遠くなかった。友達の言葉を聞いてから、田んぼの近くを通る度に、稲が目に留まるようになった。日に日に伸びていく稲。その時ふと思った。

「自分たちみたい。」クラス全員の顔が思いうかんだ。稲はやがて立派な米になる。自分達もこんなふうに成長していくのだと感じた。

田植えから約四ヶ月がたった。稲かり当日の朝、四ヶ月前から生まれ変わったかのように大きい稲。するどいかまを持って力ずくで稲を引いた。切れそうにない。心優しい支えん員さんが手伝ってくれてようやく切れた。教えてくれる人の重要さを改めて感じた。

調理実習でみそ汁を作り、白米をたいた。みそ汁には畑で作った大根を入れた。見た目はお店と似ているのに、味は手作りがおいしく感じた。白米も手作りのお米を使った。米作りに工夫をしたので米をたく時も、いつもの二倍、三倍と工夫してみようと頑張った。

収穫感謝祭では白米ととん汁を作った。全校生が食べると考えると責任を感じた。みんながおかわりをしているところを見ると、心があったまった。

とある日にテレビで米が不足しているニュースを見た。でも私は米があるのがあたりまえのように食べている。私は米を守ることが大切だと思った。

これらの経験から、教えてくださる人に感謝をし、人間と同じように成長していく米を守り続けて、私はこれからも農業に関わっていこうと思う。

わたしが感じた農業のおもしろさ、大へんさ

第二小学校　四年　梅本　なつめ

わたし自身が感じた農業は、育ったときのうれしさ、草が生えすぎて、草むしりをがんばったときの大へんさは、すっと、今も心に残っています。ここでは、感じたことをまとめます。

一つ目は、おもしろさ、うれしさなど、笑顔になることです。まず、カボチャのなえを植えたとき、そこから四年生の農業科がはじまった気がしました。じょうろで水をやたら、水をのせた葉っぱがかがやき、土もたくましくなったように感じました。次は、草をむしってまわりがすっきりして、畑がかがやいたときです。草は、心をいためつけ、野菜もいためつけるやりのように思えました。それをみんなでむしったとき、心の中にささったやりが、ポロッと取れたようなすっきりとしたそうかい感が全身をおおいました。最後は、しゅうかくです。地面を見て、ぐんぐん育った葉でカボチャが見えませんでした。でも、友だちと草や土をかき分けて、きれいな緑色の皮をもったカボチャを見つけることができました。これが笑顔になったことです。

二つ目は、泣きたくなったり、いやになったつらさや大へんさです。とくに草むしりは大へんでした。とても小さかったり、根やくきが大きすぎて、一人ではとても無理でした。そんなときは、何人かで交代しながらくきを持ってグリグリと回して土をゆるめました。ぬけたらそうかい感がでるのですが、ぬけるのに時間がかかったり、取れそうで取れなかったりするとスカッとした気持ちにあまりなりませんでした。これが、大へんで、つらい気持ちになったことです。

三年生から、農業が始まり、今まで楽しさ、苦労を知りました。育てるのはむずかしいこと、でもがんばれば実ること、これが、私を農業へみちびく、言葉になるのかなと思います。

農業科から学んだこと

上三宮小学校　四年　菊地　智愛

みなさんは、野菜や米を育てたけいけんがありますか。わたし達の上三宮小学校は全校生で一生けんめいに米作りや野菜作りをがんばっています。とくに思い出にのこっているのは米作りです。

いねの種まきでは、しえん員の方のお話を聞いて、黒い入れ物に土とひりょうをまぜ、その中に種を入れました。その黒い箱を建物の中に運びました。意外に重くてびっくりしました。でも、みんなで協力して全部運ぶことができました。

五月には、田植えをやりました。田んぼに足を入れた時に、冷たくてびっくりしました。あと何回も転びそうになったけど、上手に植えられてうれしかったです。

十月にはいね刈りをしました。いねの刈り方をしえん員の方に教えてもらいました。やってみたらかたくて最初はうまくできなかったけれど、だんだんうまく刈れました。その後、みんなで機械を使ってだっこくしました。だっこくしたいねを鉄棒にほしました。大変だったけど、みんなとやって楽しかったです。

次に野菜作りです。三・四年生が作った野菜はゴボウとそうめんカボチャとピーマンです。まずは、しえん員の方に種をもらって土の中に植えました。水やりをしに行く時に、いつも「大きく育っているかな。」とワクワクしました。ピーマンはたくさんしゅうかくできました。そうめんカボチャはしゅうかく祭で中華サラダを作りました。ゴボウはあまり育ってなくてがっかりしたけど、あげて調理したらおいしくできてうれしかったです。

わたしは米を作ってみていろんな事を学びました。一つ目は米の大切さです。毎日食べている米はたくさんの手間がかかる事が分かりました。二つ目は、しえん員の方への感謝の気もちです。わたし達が米を作れたのは優しく丁ねいに教えてくれたからです。野菜作りの楽しさを教えてもらいました。これからも、感謝して米や野菜を食べたいです。

初めてのジャガイモづくり

慶徳小学校　四年　大竹　寛人

「今年はジャガイモの種を植えるのよ。」
先生が笑顔で話し始めました。僕たちはやっと農業科のスタートがきれることに、わくわく、どきどきの気持ちでいました。なぜならジャガイモを育てることは、生まれて初めての体験だったからです。
温かい日差しの中で、農園の前にくると、農業科支援員の皆さんが、待っていてくださいました。
「ジャガイモの種芋、そうだな。植物で言ったら種をまいていくことだよ。」
僕はびっくりでした。種ではなく種芋。種芋とはどんな種なのか、頭の中が真っ白になっていました。すると支援員さんが手に持っていたのは小ぶりのジャガイモでした。
ジャガイモを育てる種は、ジャガイモ。半分に切ってあるジャガイモ。僕は不思議でした。
「ジャガイモの切ってある面を下に向けて植えてください。植えるかんかくは、山内先生のくつ一足分をあけてください。」
先生の顔をみんながのぞきこみました。そして三十センチメートルとすぐに理解できました。
その日、家に帰ると僕はすぐに、自主学習を始めました。種芋を切った面を下にして植えるのはなぜか。かんかくを三十センチメートルあけるのはなぜかの不思議を解くためでした。
ジャガイモを種として使うときは、切った面を下にすると、芽が出やすいからだそうです。切った面全体から芽が伸びるのだそうです。また、約三十センチメートルをあけるのは、切っていないところからも芽がでるので、芽がでやすくするのを防ぐためだそうです。
僕は毎日野菜を食べています。キュウリ、ニンジン、トマト、ハクサイなど一つ一つの野菜を作りにもこんなに知識が必要なのかと思うと農家の人たちはすごいと思いました。
農業科の学習を通して、農家の人たちの気持ちを考えることができるようになりました。

米作を通して思った事

熱塩小学校　四年　猪俣　大地

ぼくが農業科をやるのは四年目です。

ぼくの学校は今年で終わりです。だからぼくは春の田植えや秋のいねかりをせいいっぱいがんばりました。

春の田植えでは、高学年といっしょにやりました。やっぱり田植えは正確に植える所がむずかしいと思っていたけど三年生の時よりスムーズにできてよかったです。

夏の草とりではいねをたおさずに田車を押すことをがんばりました。田車を押してはしからはしまで行くと足と田車にどろがまとわりついていて大変でした。ぼくはよくバランスをくずすので真っすぐ進むのが大変でした。

いねかりでぼくは結ぶ係をやりました。結ぶ係をやるのは二回目です。去年よりスムーズにやることが出来ました。運ぶ係もやってたくさん運ぶことができました。来年はいねをかるので、手を切らないように気をつけたいです。

そうして今までとってきたものでしゅうかく祭をやりました。しゅうかく祭ではサツマイモのおみそ汁やさゆり米のごはんがあっておいしかったです。

ぼくのしょう来の夢は農家さんです。なぜならぼくは農業科が好きで自給自足の生活をしてみたいからです。農家さんになってお米やトマトを育てて自分で食べたりお店に提供したりしてみたいです。

今まで農業科をやってきたのでものすごく大変なのは分かっていたけれど今年は大変さより楽しさの方が大きかったです。来年はべつの小学校へ行ってしまうけれど農業科をいっしょうけん命がんばりたいです。

おいしく育ったサツマイモ

塩川小学校　四年　塚原　渉

今年、ぼくたち四年生は農業科でサツマイモを育てました。約五か月間サツマイモを育ててきた中で、楽しかったことを三つ紹介します。

まず一つ目に楽しかったことは、なえ植えです。広い畑にみんなで一つずつなえを植えている時、なえを植えるのは大変なんだなぁと思いました。でも、みんなで協力しながらやると、大変だったことがちょっと楽になって、「農業はつかれるけれどすごく楽しんだなあ」と感じたからです。しゅうかくがとても楽しみになりました。

二つ目は、サツマイモの収穫の時のことです。サツマイモを見つけてどんどんほっていたら、大きなミミズがいたのでびっくりしました。そしてまたほったら、次はサツマイモが出てきたので、サツマイモはやっぱり大きいんだなあと思いました。ちがうところをほっていくと、またミミズがいたので、この畑にはいっぱいミミズがいるんだな、そういえばミミズがいっぱいいる土は栄養もたくさんあるって支援員の菅谷さんがいっていたなあと思い出して、すごく楽しくなりました。植えた時にはあんなに頼りない草のようだったなえから、大きなおいもがたくさんとれたこともびっくりしました。

三つ目は、しゅうかくしたサツマイモを調理した時のことです。ぼくの班は大学いもを担当しました。作り方は、ちょっと大変でした。まずふかしたサツマイモをカリッとするまでフライパンで焼いて、それからたれを作ってまたサツマイモをたれに入れて焼いたら完成です。たれを入れて焼くときに、アメみたいにならないように早くかきまぜるのがすごく大変でした。でもおいしい大学いもができたし、楽しかったです。

このように、サツマイモを育ててきて楽しかったことが三つあります。来年の農業科では何を育てるのか、今からとても楽しみです。

はじめての農業科で学んだこと

第二小学校　三年　五十嵐　空良

今年から、農業科がはじまりました。わたしは、何を育てるのかとても楽しみにしていました。ついに育てる野さいが決まり、六月にカボチャと大豆をうえました。

カボチャは、たねではなく、なえからうえました。カボチャのなえは大きくて、わたしはびっくりしました。去年は、サツマイモしかうえなかったので、二つも育てると聞いてとてもたいへんだなぁと思いました。大豆はたねでうえました。大豆も、たくさんうえたいと思って友だちに、

「今年もたくさんうえようね。」

といいました。どちらも、どんどん育ったんですが、大豆はかれてしまって、なぜかなと思いました。そしたら先生が、

「水が少なかったね。」

と言ってわたしは、

「カボチャに水はやっていたけど、あまり大豆の水はあまりやっていなかったかも」と思って、大豆も食べたかったなぁと友だちと話していました。カボチャをしゅうかくしたときは、小さいカボチャや大きなカボチャいろいろな大きさのカボチャがありました。育てるのを手つだってくれたたなぎさんは、

「少し、くさっているカボチャがあるね。」

と言っていて、よく見たら、くさっているカボチャや虫に食べられているカボチャがあってすこし、悲しい気持ちになりました。そして、農業家でカボチャをどのように食べるか調べました。図書室の本を見て、カボチャサラダやカボチャプリンなどいろいろな作り方があって、何を作るか気になりました。そしてじっさいには、スイートパンプキンを作りました。おいしくできてよかったです。

草むしりや水やりは、とてもたいへんだったけど、カボチャがおいしくできてうれしかったです。大豆はかれてしまったけど来年はかれないように水をたくさんやって、元気においしく食べたいです。今年の農業科では水の大切さを学びました。

支援員の方がたや作物への感しゃの気持ち

松山小学校　三年　堀川　柚葵

わたしが農業科で楽しかったことや、おどろいたこと、感しゃの気持ちをわすれないようにしようと思ったことは、三つあります。

一つ目は、支援員の方がたに大豆の育て方やとうふの作り方を教えてもらったことです。なぜかというと、わたしは大豆をたねから育てたことがなかったからです。とうふの作り方もあまり分かりませんでした。けれど支援員の方がたにやさしくていねいに教えてもらったおかげで友だちときょう力しながらとうふを作って食べることができました。豆が緑色だったからとうふも少し緑色でした。でも、すごくおいしかったです。

二つ目は、作物への感しゃをこれからもわすれずにしようと思ったことです。なぜかというと、０さいから作物やお米を食べてきたからです。そして作物いがいにぶたや牛などいろいろな動物、魚にもたいへんおせわになったし、水にも感しゃしています。なのでこれからも「いただきます」「ごちそうさま」をわすれずにいいたいと思います。

三つ目は、お家の人にもっと感しゃをしようと思いました。なぜかというと、朝や、夜ごはん、休みの日には昼ごはんをバランスよくがんばっていろいろな食材をつかって調理してすごくおいしいごはんを作ってもらっているからです。「ありがとう」や「おいしかったよ」などの言葉も大切にしたいです。

この三つに感しゃして、農業科で学んだことを生かしながら、大人になったら料理がたくさんできるようになりたいと感じました。支援員の方がたや、先生のみなさんいろいろなことを教えてくださり、本当にありがとうございました。これからもよろしくおねがいします。

大豆を育てて

関柴小学校　三年　髙橋　陽那

わたしは大豆を育てて大変だと思いました。なぜかというと，大豆を五月に植えてから，一度枝豆としてしゅうかくして、そのあとさらにかんそうさせたあとに，もう一度大豆にしていたからです。

今までわたしは何も考えずにふつうに食べていた大豆ですが、とうふ、しょうゆ，みそなど，いろいろなものになっていて，育てるのも，しゅうかくするのも大変なものなんだと初めて知りました。農家の方はたくさん育てなければいけないので、さらにすごいと思いました。ただ，育てるのは大変だけど、枝豆はすごくおいしくて，がんばってしゅうかくしてよかったなと思いました。

そのあと，大豆からきなこを作ることになりました。わたしはきなこが大好きなので，がんばろうと思いました。でもしゅうかくの時には、大豆やさやの中に虫が入っていたり、ぬれていたりしてちょっと気持ち悪くて大変でした。でも大好きなこが食べられることを思いだして、さいごまでがんばりました。

大豆をきなこにするのは，思ったよりもかんたんにできました。まず大豆をいってから石うすに入れ，回していくものでした。それほど重くなく楽しくひくことができました。みんなで作ったきなこはいつも自分が食べているきなことはちがう味でおいしかったです。農業科しえん員の小野さんが持ってきてくださったきなこのようにきれいにはできなかったけれどみんなで作れたことがよかったなと思いました。次にきなこを作るときにはもっときれいに作れるようにがんばりたいです。

これからもたくさんのやさい，食べ物や植物などを育てて農業科しえん員さんのように人に教えられるようになりたいです。

カボチャの思い

塩川小学校　三年　遠藤　蒼天

ぼくは、カボチャが大すきです。三年生になって、カボチャを育てることになりました。

なえを植えたときは、どんどん育ってほしいとねがいをこめながらなえを植えました。

なえを植えた日からこうたいで水やりに行きました。植えたては暑さで元気のなかったなえも、しっかりしてきました。ぼくが植えたなえをじっと見ていると、元気に育っているよという強い思いが心の中でつたわりました。だからぼくも、元気で育ってね、と心の中で答えました。

夏休みになると、カボチャは元気かなと心配になりました。たまに畑に行って様子を見に行きました。見ると元気がない日もあって、その時は水をあげました。たまに見に行くと、大きい葉と葉の間に大きいカボチャが見えました。ぼくは思わず、

「あっ、あった。」

と声がでました。だんだん食べられそうな位の大きさでした。それからは、カボチャの味を想ぞうして、学校で食べる日を楽しみしていました。

夏休みが終わって、しゅうかくしたカボチャのかんさつをしました。緑色の皮にぼつぼつの点があって、さわるとざらざらしていてびっくりしました。

さい後は、しゅうかくしたカボチャを使って、みんなで料理をしました。カボチャのスイートポテト風とカボチャチーズごまだんごを作りました。みんなで作ったカボチャは、あまくておいしかったです。ぼくは、またカボチャに、とってもおいしかったよ、と心の中で言いました。すると、カボチャの、おいしく食べられてうれしいという思いがまた強くつたわって心も体もあたたかい気持ちになりました。

カボチャを育ててみて、作った人だけではなく、カボチャもおいしく食べられたいという気持ちが分かりました。これからも、いろいろな野さいをおいしく食べたいな。

楽しかった農業科

姥堂小学校　三年　東條　未怜

わたしは、農業科のじゅ業でピーマン、ミニトマト、オクラ、えだ豆、ジャガイモを育てました。育てていく中で、大へんな事やすごいなと思ったことがたくさんありました。

五月、しえん員の新くにさんといっしょになえやたねをうえました。みんなで土をほり、なえやたねをうえていきました。野さいによってたねの大きさや形がちがうことにおどろきました。みんなで

「大きくなあれ。」

とおまじないをかけるように言いました。

次の日から水やりがはじまりました。毎日みんなでできょう力しながら水やりをしました。水やりは思ったい上に大へんでした。

ある日、畑に水やりに行くとうえたオクラのたねからめが出ていました。よく見ると理科のじゅ業で習った「子葉」でした。

「わあ、すごい。」

とみんなおどろいていてよろこびました。

だんだん日がたつにつれて、葉がたくさん出てきてくきがのび、花がさきました。あんなに「大へんだなぁ。」と思っていた水やりも、野さいがどんどん成長していくのがうれしくてがんばれました。

七月になり、ピーマン、ミニトマト、オクラに実がなっていました。たくさんとれました。オクラは、お店で売っている物よりも大きく育ちました。

ジャガイモがとれる時期になったので、みんなでジャガイモほりをしました。土をほっていくとジャガイモが見えてきました。うれしくてたまりませんでした。ほっていくとわたしが思っていたよりもたくさん出来ていて、びっくりしました。「たくさんカレーが作れそう。」と思いました。とれたジャガイモを使って、作ったカレーは、とてもおいしかったです。

農業科のじゅ業で、育てる大へんさと成長していくすごさを感じました。来年は、どんなことを感じられるか、今から楽しみです。

令和６年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】　（敬称略）

関東学院大学理工学部　教授	佐藤　幸也
喜多方市教育委員会　教育長	佐川　正人

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長	下重　祐三
会津農林事務所喜多方農業普及所 経営支援課長	穴澤　崇
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主査	一条　昌恵
ＪＡ会津よつば喜多方営農経済センター　営農振興課長	宮下　貴明
喜多方市小学校農業科支援員	山田　義人
喜多方市産業部農業振興課長	小林　幸太郎

【事務局】

喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	中野　富全
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	五十嵐　直登
喜多方市教育委員会学校教育課 学校経営アドバイザー	髙橋　弘悦

令和６年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

令和７年３月　　発　行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会